

富山市議会 政務活動費不正を取材して



議員報酬引き上げに反対する市民たち

チューリップテレビ 報道制作局 記者 砂沢智史

題字

中川 順

みん
な
が
い
ろ
ろ
う
民
放
史

14 人も市議がまるでドミノが倒れるかのように次々に辞職した富山市議会。

連日の報道により、政務活動費の不正が次々と暴かれていった。

問題の発端は、議員たちが推し進めた自らの報酬の引き上げだった。足りない議論やあいまいな根拠で、一気に月に 10 万円もの大幅アップを実現させたことで批判が高まり、市民・マスコミの注目を集めた。

私たちは、議員の活動の実態や報酬の多寡を考える材料として、議員たちの「第二の報酬」と呼ばれる『政務活動費』に目をつけた。するとそこには、総額で 4000 万円を超える不正な支出の実態が眠っていた。

― 議員報酬の引き上げ ―

去年 4 月、富山市議会の議長は森雅志市長にある要望を提出した。それは議員報酬の見直しだ。富山市議会の議員報酬は月額 60 万円。富山県内の議会では県議に次いで 2 番目に高い。富山市議会が要求したのは、この月額報酬を 10 万円以上引き上げて欲しいというもの。有識者による審議会を開き検討

して欲しいというものだ。主導したのは、最大党派・自民党の会長を務める中川勇市議。公明党派と民進党派系ととともに報酬の引き上げを推し進めた。

私たちが富山市議会の取材を始めたのもこのときだ。

そもそも市議会議員の報酬とは、何を基準に決めるべきなのか、また市議会議員は普段どんな活動を行っているのか？ 記者 2 年目の私は中川市議に単独インタビューを申し込んだ。問い質すのは報酬引き上げの理由だ。



報酬引き上げについて中川市議に単独インタビュー

インタビューの許可が得られ、中川市議を訪ねると、やや不機嫌な様子。実はこの数日前、地元紙

に掲載された社説がその原因だった。社説には要望した報酬引き上げ額が過大で、お手盛りと批判されても仕方がないと書かれていた。

中川市議はこの社説に憤慨していたのだ。機嫌を伺いながら報酬引き上げの理由を尋ねると、中川市議は一枚の紙を示した。それは、月額60万円の報酬から税金や国民年金・国民健康保険などを差し引いた額を計算した資料。月々の手取りが30万円弱になるとの試算が示されていた。それを見せた上で、議員の身分保障が不安定なため、議員になり手が出てこないのだと訴えた。

「あなた、これで議員になりますか？」中川市議からの質問に私は首を振って「無理です」と伝えた。

中川市議の言い分に納得してしまったのだ。しかし、報酬の引き上げ問題はこのあと不可解な展開を見せ、取材がさらに加速することになる。

―わずか3時間の審議―

決まっていた結論―

中川市議へのインタビューの翌日、報酬の引き上げを審議する有識者の初会合が開かれた。

委員に選ばれたのは全部で8人。大学教授や公認会計士、老人クラブやPTAなど各種団体の代表で構成されている。審議時間はおよそ1時間半、会合は非公開だ。

終了後に審議会の会長に取材すると、報酬の引き上げは全会一致で賛成になったという。そして、次回会合で引き上げ額を議論するということであつた。



市長が招集した審議会の初会合

3日後に開かれた、2回目の会合。今回も非公開のため、報道陣は部屋の前で終わるのを待った。しかし、私たちの期待は裏切られた。審議会の会長は、取材に答えられないという。審議を依頼し

た市長への答申が終わるまでは内容を明かせないという言い分だ。議会や行政の取材のなかで非公開の会議は珍しくないが、終了後に何も答えないというのは異例だ。

記

見直しの方向性
議員報酬の月額を、次の表のとおり、一定程度引き上げるべき。

区分	現行	見直し案
議員	600,000円	700,000円～730,000円
議長	715,000円	850,000円～880,000円
副議長	645,000円	770,000円～800,000円
常任委員会委員長及び	600,000円	730,000円～750,000円

市長に渡した報酬引き上げの要望

審議会や市の姿勢に疑念が生まれた。

市長への答申はおよそ一週間後に行われた。審議会の結論は、月額60万円の議員報酬を70万円に引き上げるといふもの。月額70万円は全国47中核市(現在は48)のなかで最高額となり、ボーナスにあたる期末手当を含めると年収はおおよそ1,160万円となる。

審議会はこの結論をわずか2回、合わせてたった3時間で出した。後の取材で、審議会には自民党に近い委員が少なくとも4人含まれていたことが判明した。

このうちの1人はかつて富山市議会の議長を務めた自民党の元市議だった。取材を重ねると、この人物が終始議論をリードしたということだった。そして、審議会が報酬の引き上げを認めた最大の根拠は『議員に対する今後の期待』という曖昧なものだった。

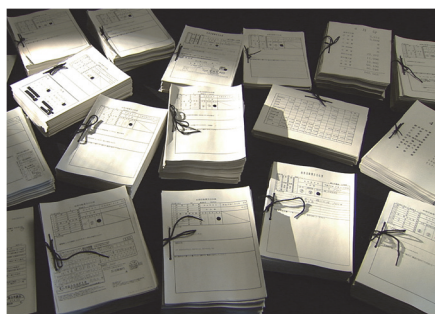
―取材が加速―そして情報公開請求―

報酬を上げれば、議員がさらに活躍するとも言えるのだろうか。報道各社はこぞって、この問題を取り上げた。

議員にアンケートを行ったり、街で市民にインタビューするなど、各社様々な視点でこの問題を取り扱った。しかし、私の中にはまだ解決していない疑問があった。

それは「議員は一体どんな活動をしているのか？」この問題を扱う際に最初に抱いた疑問の答えがまだ見つかっていなかった。取材を進めるなかで一部の議員から「報

―不正の発見―
情報公開請求した資料は開示ま

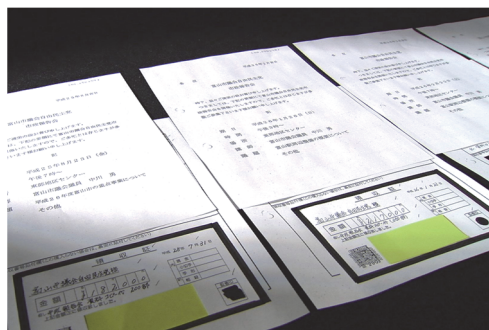


政務活動費の支出伝票 接写

酬ではなく、政務活動費を上げるべき」という意見も聞かれた。『政務活動費』とは、議員が政策の立案や調査研究を行うために使うことが許されている経費で、原資は税金だ。報酬の多寡を考える際には、この政務活動費も合わせて考えるべきではないか。

政務活動費を使うには『報告』が必須で、使途やその目的と領収証などの資料を提出しなければならぬ。「これを見れば議員活動の一端が分かるかもしれない」そう考えた私は、直近3年分の全議員の資料の情報公開を請求した。

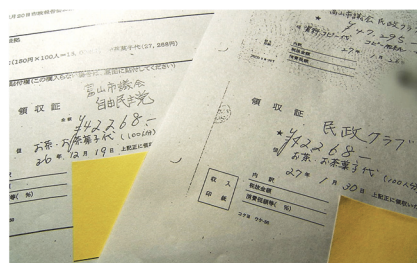
市民の批判が高まるなかで進められた引き上げ。議会に対する不信は残るものの、一旦この問題が落ち着きを見せ始めたところに、資料開示の連絡が届いた。ちょうど



中川市議が提出した支出伝票と案内文

でに時間を要した。請求したのは5月末。しかし、最初の1年分の資料4300枚が私たちの手元に届いたのは7月の半ばだった。

その間に、自民党を中心とする引き上げ賛成派の議員は、審議会の結論が『免罪符』と言わんばかりに、「答申を重く受け止める」というスタンスを貫き、6月の市議会定例会で報酬の引き上げを可決してしまった。



会派を超えた不正の疑い
後から数字を書き足した領収証

―蔓延していた不正―
わずか半年で14人もの市議が辞職した政務活動費の不正問題。手口の多くは領収証の偽造で、業者から手に入れた白紙の領収証を利用したものだった。

この頃、地元紙が県議の不正をスクープした。

高額な書籍を購入したとして政務活動費を受け取っていたというものだ。実際には図書は購入しておらず、書店の領収証を自ら偽造していた。

「富山市議会にも不正は眠っているのでは？」開示された資料を見ながら、そんな思いが浮かんでは自然なことだった。

―渦中の業者を直撃取材―
8月18日、私は富山市内で業者に取材をかけた。

取材により、判明したその数は4年間で13回。伝票には、いずれも同じ印刷会社の領収証が添付されていた。名目は市政報告会で配布する資料の印刷代。本当に印刷をしていたのか？



中川市議の自宅に直撃取材

発端となったのは、あの『中川勇』市議のものだ。中川市議の支出伝票に添付された案内文には、市立公民館で市政報告会を開いたとあった。しかし、市に情報公開請求し公民館の使用履歴を確認すると、市政報告会は開かれていなかった。

「取材には答える。ただし、カメラはやめて欲しい」印刷会社の社長は語った。

市議の不正を報道するには、領収証の発行先への取材は避けられない。しかし、発行先の業者にとってマスコミの取材は商売にマイナスにしかない。

取材の申し込み、撮影の交渉、放送後にきた業者からの抗議……。一連の取材の中で最も難しいと感じたのが、業者への取材だった。



デスクと2人で続けた領収証のチェック

印刷会社への取材は難航を極めた。社長は多忙を理由に、取材を先延ばしにしたがった。しかし、中川氏への直撃取材を先に済ませ

ていたため、放送日を遅らせると他のマスコミに情報が漏れることに繋がりがかねない。積み上げてきた取材の成果がスクープにならないことは避けたかった。

―後に発覚した隠ぺい工作―

頼み込んだ挙句、放送当日8月19日の午後、10分だけの約束で取材を受けてくれた。

領収証に記載された受注額・部数の確認を求めると、社長は衡立の向こう側に移動した。会社の受注記録は見せられないという。

社長の答えは「領収証の内容は全て正しい」だった。

この答えに納得できるはずはない。しかし、粘っても証言は得られなかった。

このため、この日は社長のインタビューをあきらめた。そして、市政報告会が未開催だった事実焦点を絞り、中川氏の政務活動費の報告が虚偽だったとスクープ報道した。

実はこのとき、印刷会社の社長は私たちの取材に対し、事実を隠していた。

事前に中川氏から口裏合わせを依頼されていたのだ。



中川市議の不正 最初の報道

中川氏はこの会社から白紙の領収証の束をもらっていた。

それを使い、印刷代の名目で政務活動費の架空請求を繰り返していた。

―「もう隠せない」―

真実が明らかに―

この事実が初めて明らかにしたのは8月31日、不正発覚の報道後、中川氏が初めて開いた記者会見だ。

開始前、私を含め会場にいた記者たちは「中川氏は架空請求を絶対認めない」と予想していた。富山市議会のドン・中川氏はプライドが高く、自らの非を認めるようなタイプではない。また、架空請求

求を示す決定的な証拠も見つかっていなかったからだ。

私は中川氏にどのように質問し、不正の事実を引き出すか、その一点に集中していた。ところが、会見の冒頭、中川氏が述べたのは、「流用した」「印刷会社は何も悪くない」「大変なことをしでかした」という言葉。



辞職後に会見を開く中川市議

語られたのは架空請求の事実と市民への謝罪だった。

なぜ自ら真実を語ったのか？あの場に居た記者は皆、同じ思いだっただろう。

求めていた答えが目の前に差し出され、即座に理解することが出来なかった。

―新たなスクープ―

翌朝、私は印刷会社の社長と再び話をした。

中川氏の言い分が全て正しいのか、中川氏から口裏合わせを依頼されたのか、確かめるためだ。

「軽率なことをした。申し訳ない」印刷会社の社長は口裏合わせを認めた。

そして、次の不正発覚に繋がる情報を口にした。

「今まで受けた仕事は中川さんの選挙ポスターだけ。他の仕事は一切受けていない」

このとき、私は中川氏のほかにこの印刷会社の領収証を使っていた議員がいたのを思い出した。

デスクに報告すると、すぐに取材体制が組まれた。

新たなスクープがとれる可能性を感じ、心が震えた。

9月1日、テレビ各局は前夜の中川氏の辞職記者会見を詳しく報じた。

しかし、私たちがトップニュースでオンエアしたのは『もう1人の議員の不正』だった。

この報道を契機に、報道各社は総力体制で富山市議の政務活動費を調べ始めた。



不正発覚2人目となった谷口市議

不正を行った議員は、この2人に留まらないことはすぐに予想できたためだ。

そして辞職ドミノが始まった。

―発表に頼らない取材の大切さを実感―

その後、富山市役所の議会棟には毎日朝早くから報道陣が押しかけた。

1社につきカメラ4台以上で取材に臨むのが当たり前の光景になり、議会事務局の隣にあるロビーは、報道各社のベースキャンプとなった。

他局のニュースや新聞の見出しにも過敏になった。毎日新たな不正が発覚する異常事態。他社の後

追い取材をしながら、新たな不正の先行取材も行わなければならぬ。

毎日のトップニュースは富山市議会、VTRが仕上がるのはいつも放送ギリギリ。激務が続いた。

議員の領収証をチェックする地味な取材から始まった政務活動費問題。

ふと抱いた違和感や小さな疑問を放置しなかったことが、富山市議会に広まっていた不正を暴くことに繋がった。

調査報道は空振りも多く大変だが、やりがいがある。心から報道が面白いと感じたのもこのときが初めてだ。

一連の問題を受けて、県内の地方議会はこのぞって議会改革に取り組み始めた。

政務活動費の運用ルールの見直しをはじめ、面倒な手続きを行わなくてもインターネットで収支報告書や領収証を閲覧できるようにするなど、住民への情報公開度も高めた。自らの議会が最も改革が進んでいると言わんばかりの改善レースが起きている。

また、富山市議会では議員とメディアの関係も変わった。これまで議員は報道機関を下に見るよう

なところがあった。呼び止めても無視をされたり、取材に応じてもらえなかったりすることもあった。

ところが今回の件を受け、議員たちはメディアに対し謙虚になった。申し入れた取材や問い合わせに、誠実に対応するようになった。

不正を追及する過程で、各メディアは、『権力の監視』という本来の役割に目覚めたし、議員たちもメディアの力を再認識したのだと思う。

議会改革はまだ始まったばかり。今後も粘り強く取材を続けていきたい。

民放史で紹介した『富山市議会 政務活動費不正を取材して』をスクープしたチューリップテレビは、平成29年度「日本記者クラブ賞 特別賞」、「ギャラクシー賞 報道活動部門 大賞」に選ばれ、報道の果たす本来の役割を示したものとして高く評価されました。